



Title	流音の特徴から見た役割語としての韓中ピジン：日中ピジン資料を参照しつつ
Author(s)	金, 晏貞
Citation	語文. 2014, 103, p. 66-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70949
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

流音の特徴から見た役割語としての韓中ピジン

一日中ピジン資料を参照しつつ一

金 昊 貞

1. はじめに

1.1 中国人発話キャラクターの役割語

日本のポピュラーカルチャー作品において、中国人発話キャラクターが登場する際に用いられる言葉づかいに、次のようなものがある。

(1)さっさと白乾児（バイカル）とマイクロフィルム持ってくるよろし

(有閑俱楽部 6 : 6)

(2)女装だと思いこませてしまたある。

(らんま 5 : 129)

(1-2)の下線部を見ると、語末に依頼・命令・許可文の「よろし」、平叙文の「～ある」等が用いられる言葉づかいが、独特な機能を担っていることが分かる。すなわちこれらの発話者が、日本語を流暢に話せない外国人、特に中国人であるということを暗示しているのである。金水（2003; 2007; 2008; 2014）では、このような言語を役割語の一種と考え、〈アルヨことば〉と呼んで、その歴史的形成過程を考察した。

一方、(1-2)に似た機能を持つ表現が韓国のポピュラーカルチャー作品においても存在することが確認できる。その中国人キャラクターの言葉づかいには、以下のような表現が指摘できる。

(3) Ulli sallam-illo⁽¹⁾ noemul johwahanda-hae ! Ttinghoa !

私 [は] 賄賂 好きだ-断定 ! テインホア !

(朝鮮王朝五百年 (下) : 111)

(3)の出典は、朝鮮王朝の五百年の歴史を面白く編集した子ども向けの学習マンガ本である。下線部を見ると、一人称として「ulli sallam」を用いたり、文末に「hae」が使用されている。これらの表現は、韓国語としては非標準的なものであ

り、韓国語話者の感覚では、発話者が中国人であるということを表していると感じられる。

1.2 本研究の考察対象

(3)の下線部における一人称代名詞をみてみよう。話者自身を「na（私）」「uri（私たち）」の1人称代名詞ではなく、「ulli sallam」という非標準的な表現を使用している。

本稿では、このような中国人話者を暗示する韓国語の表現がどのように形成されたかという問題の一端を、歴史的資料を用いて解明していく。その際に、日中ピジンの資料も対照することとする。

本稿の構成は以下の通りである。第2節では役割語の定義とピジンの特徴について、先行研究に基づき、整理する。第3節では本稿で扱う問題の所在を述べる。4節では、流音をベースにした役割語としての韓中ピジンの形成について分析する。5節では4節で述べたステレオタイプの形成に必要な音素/r/ → /l/の入れ替え現象を日中ピジンと対比しながら考察を行う。

2. 役割語の定義とピジンの特徴について

「役割語」は、金水（2000他）によって導入された概念であり、金水（2003）では以下のように定義している。

(4)ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。

金水（2003：205）

「ピジン」は、『日本国語大辞典』に次のように説明されている。

(5)（ピジンは）共通言語をもたない複数の集団が接触して、集団間コミュニケーションの応急手段として形成される接触言語の一種。音声面では一方の言語を、単語と文法の面では他の言語の形を強く残し、文法はかなり簡略化される。ピジン語の話者は日常生活での母語を必ず持つ。世界各地に多数見

られるが、太平洋諸島でのピジン英語が最もよく知られている。

(日本国語大辞典第二版 第十一巻：280)

説明の通り、異なる言語を話す複数の集団が接触するとき、一方の言語の単語が他方の言語に「借用」される現象が見られる。さらに接触が長くなると、単語の借用に留まらず、発音や文法面に影響が及ぶこともある。ピジンは規範的な言語とは言えないが、文法が単純化され、語彙も少ないので、長い時間をかけた学習を経ずに運用できるという利点がある。しかし、一般には決まり切った内容についてやりとりする場面に使用が限定され、込み入った内容や新規の事項を伝えようとする場面では役に立たなかったり、誤解を生じさせたりすることもしばしばである。

ここでピジンについて要点をまとめておくと、①文法が単純化される、②語彙が減少する、③多義語が多くなる、④外国語の語彙が混じる、⑤一種の接触言語である、⑥ネイティブ・スピーカーがいない、ということになる。金水（2003; 2007; 2008; 2014）では、（1-2）で示したような〈アルヨことば〉に、もととなる日中ピジンがあったと推測している。(3)のような韓国語の表現にも、同様のピジンの存在が疑われる所以である。

3. 問題の所在

改めて、(3)の下線部で一人称代名詞として使用されている「ulli sallam」をみてみよう。この表現が奇妙なのは、通常の韓国語であれば一人称「uri」が使用されるのに対して、「ulli sallam」という「r」が「l」に置き換わった上に「sallam」という不必要的語が付加された表現が使用されている点である。この奇妙な表現について、まず、意味の面に注目すると、「ulli sallam」は「私たちの人・我々の人=私」という意味になる。また、この表現が「私たち」という意味を持つこともある。どちらの意味になるかは、文脈から判断しなければならない。次に、形式の面に注目すると、「ulli sallam」は「uri sallam」「ulli saram」「uri saram」といった異形態として資料に現れる。

【中国人の話す片言ないしピジン韓国語の例⁽²⁾】

- (6) Uri sallam geureon geo moreunda - hae.
私・私たち [は] そんな こと 分からない - 断定。

(中国見聞録：14)

- (7) Geugeo ulli sarami sseuneun junggug donhago biseusha-
(3) 78

da-hae.

それ [は] 私・私たち - が 使う 中国 [の] お金と 似ている
- 断定。

(博物館探査記 学習21: 81)

(8) Uri saram 8 johahanda-hae !

私・私たち [は] 8 [が] 好きだ - 断定 !

(動映像で易しく学ぶ超初心者中国語: 8)

(9) Ulli sallam hagsaengdeul mideo - hae.

私・私たち [は] 学生さん [を] 信じる - 断定。

(一番目とびりのページ: 103)

なお、「uri saram」は、標準語としては以下のように通常使われる。

【「uri saram」の通常の言葉づかいの例】

(10) Jeo, jeo sarameun uri narae wassdeon geu huindungi, majayo.
あ、あの人は 我が 国へ 来た その 白人, そうです。

Uri saram anieyo !

うちの人 ではないです !

(ロビンソンクルーソー: 164)

(10)の「uri saram」は「うちの人」と翻訳されるような三人称の意味で使われている。これに対し、(6-9)の中国人の例では「uri (私たち)」+「saram (人)」の組み合わせ「uri saram」が「私」もしくは「私たち」といった一人称の意味で用いられており、(10)の通常の用法とは区別されるのである。

そのために、次節では、中国人発話キャラクターのピジン的な言葉づかいの中で、一人称における〈流音〉がどのような特徴を持ち、どのように変遷して来たかを考察し、日韓のピジンの類似性と相違性を比較する。

4. 役割語としての韓中ピジンの形成一斑

4.1 「uri saram」の成り立ちについての仮説—「junggug (中国)」の脱落—

「urisaram」などの一人称は、なぜ(3)で見たような表現として使われるようになったのだろうか。本節では、「uri junggug saram」(私たち中国人)という正しい表現がまず存在し、そこから慣用的に、「junggug」(中国)が脱落した表現が生

じたのではないかと考える。そのことを示唆する例文として、(11)を見てみよう。

(11) Uri junggug-i saram bidani manhi manhi pala-haessda.
私たち 中国 人 [は] 絹を たくさん たくさん 売った。
Uri saram-i don joha-hae. myeongwoli joha-hae.
私 [は] お金が 好きだ。 明月が 好きだ。
(王書房恋書⁽³⁾ : 1973)

例文(11)では、「uri junggug saram (私たち中国人)」と「uri saram (私たちの人)」が同時に使用され、同じ意味として用いられている。ここから「uri junggug saram」の中にある「junggug (中国)」が脱落したのではないかという推測が成り立つ。

つまり、「uri saram」は「uri junggug saram」が原形で、その中の「junggug」が脱落し、今の「uri saram」になったのではないかと考えるのである。

⇒ 「uri junggug saram (私たち中国人)」 → 「junggug (中国) 脱落」 → 「uri saram (私)」

ただ1例でこの形成過程が実証されたと言いくることは難しいが、ピジンではしばしば非文法的な脱落が生じ、そして固定化されることを考えると、有力な仮説と見なすことができるだろう。

次に、韓国資料における中国人の発話でしばしば見られる、流音 (r および l) の変容現象について考察しよう。

まず、Kim Ujong 作の隨筆集『I joyonghan sigane (この静かな時間に)』において、ピジン韓国語の一人称である「ulli sallam」を流音と関連付けて日本と中国を比較する次のような興味深い文章がある。

(12)同じ東洋人たちでも言語習慣にしたがって舌の機能が別々に発達している。中国人たちは「uri saram」を「uri sallam」または「ulli sallam」と頻繁に発音する。そのような音ではないがとてもそれに近い発音を上手にする。その代わり韓国語のR音をまともに出すことができない場合が多い。一方、日本人たちはL音を出す事はできないがR音はよく出す。それで「sabal (どんぶり)」は「sabaru」で、「sinbal (履き物)」は「sinbaru」、「yangmal (靴

下)」は「yangmaru」と言う。

(I joyonghan sigane (この静かな時間に) : 144)

Kim Ujong 氏が(12)で述べている内容の根拠は、どこから来ているだろうか。通常の「uri saram (うちの人)」とは異なる独特な語義を持つ一人称「uri saram (私)」が形成されている上に、さらに音節末に流音に該当する「l」が添加される。それではなぜそこに流音が加わって「uri」が「ulli」に「saram」が「sallam」になるのか、その根拠を探してみよう。

4.2 日本語・英語・韓国語の流音比較—音素/l/と/r/の弁別に対する研究—

Park Seegyo (1996) によると、英語には二つの流音、すなわち弾舌音/r/と歯槽舌側音/l/が別個の音素で存在する。したがって英語を母国語で使う話し手は、この二つの音素をどの位置でも自然に区別することができる（例えば語頭、母音間、複子音）。

一方、日本語にはただ一つの流音の音素が存在すると考えられ、その代表音は普通/r/で表記される。ただし音声レベル (phonetic level) では幾多の異音を持つと報告されている。Tsuzuki (1992) によれば日本語の流音は軽く舌を巻いた舌側音から歯槽弾舌音に至るまで多様な変異音を持つ。この音声的変異音は音韻環境や話し手に従って多様に現われる。

しかし、このような音声的側面で多様な変異音があるにもかかわらず、その変化は無意識的なものため、日本人は流音の代表音として/r/を持っていると判断できる。そして Park Seegyo (1996) によると、日本語母語話者は、英語の二つの流音/l/と/r/を聴取する時、この二つの音をすべて自分の母国語にある /r/ 音素で認知する。その上に日本語では音節の語頭にしか流音が来られず、また、複子音は許容されないため、英語での複子音の一構成要素として来る流音に対しては認知と調音の両側面で難しさを感じるはずであるという。

一方、韓国語の場合にも音韻的側面では一つの流音だけが存在し、この流音の代表音として多くの学者が/l/を好んでいる。しかし韓国語では日本語とは違い一つの流音音素に対して二つの明確な異音が存在する。一つは弾舌音 [r] で、もう一つは歯槽舌側音の [l] である。この二つの異音は母音間の位置と次の音節が子音で始まる音節末位置あるいは休止前の音節末位置でお互いに相補的分布にある。母音間位置では前者の音が例外なしに現われ、一方次の音節が子音で始まるか、あるいは休止前の音節末位置では後者の音が現われる。

また、二つの流音が連続で来る場合には長い [l] 音が発音される。韓国人が英語の/l/と/r/音を習得するには、この長い [l] 音はとても重要な役目を担当する。すなわち、英語の/r/を認知するとか発音する時には [r] 音を使うのに比べ、英語の/l/を認知するとか発音の時には長い [l] 音を使う。このような事実は韓国語のつづり方にもそのまま反映される。

4.3 「uri saram」から「ulli sallam」への成り立ち

中国語母語話者が見せるエラーの類型を通じてその原因を推測すると、それは韓国語と中国語の流音の実現の差にあるものと考えられる。すなわち、韓国語の流音には舌側音 [l] と弾舌音 [r] 二つがあるのに対し、中国語の音韻体系には舌側音 [l] しか存在しないからである。中国語音韻体系の弾舌音 [r] の不在によって中国語母語話者が韓国語の弾舌音 [r] を舌側音 [l] で発音する傾向がしばしば発生する⁽⁴⁾。

ここで、韓国語の舌側音/l/と弾舌音/r/が実現する類型を、6種に分類して示す⁽⁵⁾。
(Sin Hocheol (2003) から修正を行なった)

1類型は [母音] + [l] 類型で、「mal：言葉」「gaeul：秋」

2類型は [r] + [母音] 類型で、「ramyeon：ラーメン」「radio：ラジオ」

3類型は [l] + [l] 類型で、「byeollo：別に」「heulleo：流れて」

4類型は [l] + [子音] 類型で、「albam：げんこつ」「ttalgi：いちご」

5類型は [l] + [母音] 類型で、「aideul-i：子供達 - が」「najmal-eun：昼の話 - は」のような自立形態素と依存形態素の結合

6類型は [母音] + [r] 類型で、「geurim：絵」「saram：人」

Sin Hocheol (2003) は「2類型、5類型、6類型は中国語母語話者が発音に困難を経験する所であり、2類型は弾舌音/r/を舌側音/l/で発音の誤りを見せる類型で、5・6類型は舌側音/l/を前後音節の終声と初声に添加して発音するという誤りを見せる類型である」という。

韓国語で中国人発話キャラクターの役割語的な言葉づかいの言語表現ともいえる1人称「uri saram」は6類型に当たる。6類型の [母音] + [r] 類型は、前の音節に舌側音 [l] を添加し発音するエラー形態を生じる。6類型の流音は全て弾舌音 [r] で発音しなければならないものだが、中国語母語話者はこれらを舌側音 [l] で発音する傾向を見せる。

⇒ 「uri」 → 「ulli」, 「saram」 → 「sallam」, 「ariran」 → 「allilan」

つまり, 中国語母語話者が韓国語を話す際, 発音が困難だったため, 「uri」が「ulli」に, 「saram」が「sallam」になる [l] + [l] の形式が生じたと思われる。

さらに, 5類型 [l] + [母音] は, 中国語母語話者が発音のエラーを多く生じさせる類型である。この類型は他の類型に比べて異なる特性がある。すなわち, 自立語と依存語の結合過程で発生する発音という点である。この類型の最終発音形態は6類型で分類しても良いだろう。

⇒ 「aideul-i」 → 「aideuri」, 「najmal-eun」 → 「nadmareun」

上のように5類型は連音という現象を経て6類型のようになる。しかし, 中国語母語話者が上記の類型を発音する際, 生じさせるエラーがまさに下記の例と一致する。

⇒ 「aideul-i」 → 「aideulli」, 「najmal-eun」 → 「nadmalleun」

これはやはり中国語の舌側音 [l] の影響に分析される。従って先に前の音節の終音 [l] を次の音節の初声に移して発音しながら, その便宜のために [l] 音をより添加する類音添加現象と類似していると判断される。つまり, 母国語の発音習慣のため自分の発音を楽にさせるべく, 次の音節の空席に舌側音 [l] を添加し発音するのだと考えられる。(1)の「pal-a (壳った)」が実際の歌で「palla」になる点も一脈相通ずると判断される。

それゆえ, 韓国語の弾舌音/r/を実現する際に語中で母音に挟まれた環境が生じた時, 舌側音/l/を得るためにㄹ + ㄹ → ㄹのように重ねることを取った結果, この点が中国人の音声的特徴として利用されたのである。また, このような表記こそ中国人が/r/の発音が苦手だという認識をより根深く発展させ, 中国人発話キャラクターらしい言語表現として定着させたのかも知れない。

上記は現代の中国語話者の例示ではあるが, 「uri」が「ulli」に変わる音素/r/ → /l/への入れ替えの根拠になると考えられる。それではこのような音素の入れ替え現象は, 韓国語にのみ生じる現象なのかというと, そうではない。次節では, 日本を含む他国での例を示していく。

5. 近代当時の世相とステレオタイプの形成—要因は音素/r/ → /l/の入れ替え現象への思い込み—

5.1 *Exercises in the Yokohama Dialect*

ここで、幕末・明治の横浜での行われた一種のピジンについて記した語学書 *Exercises in the Yokohama Dialect* を紹介する⁽⁶⁾。

小玉（1999）によると、初版は1873年に刊行、再版は1874年に刊行、改訂増補版は1879に刊行される。初版は未だ現存が確認されておらず、再版と改訂増補版は横浜開港資料館に一冊ずつ所蔵されている。この改訂増補版の同書巻末に付された3ページの Nankinized-Nippon（南京訛り日本語）は、香港司法長官の Mr. Ng Choy 氏の要望で the Bishop of Homoco（本名 F. A. Cope）により追加された章である。この章は、横浜の中国人が話すピジンの特徴を述べたもので、語彙、表現その他からみた特徴が示されている。この章では、音素/r/に関する興味深い特徴も現れている。

(14) I shouid like to borrow 500 Yen from you if you have them. (もしあ持ちなら、五百円貸していただきたい)

Anatta go-hakku lio aloo nallaba watark-koo lack' shee high shacko dekkeloo aloo ka. (アナタ ゴハクリヨー アルナラバ ワタクラシ (=私) ハイ シャック デキル アルカ) (三二頁)

金水（2003：192）

さらに、杉本（2010）は、横浜でのピジン日本語と中国系の人々が使っていたピジン日本語との間に多少のずれがあるとして、その使用現況を指摘している。

(15) 英語を母語とする英米人たちは Walk-karrymasing とか Walk-kawymasing のつづりにみられるように、語中の母音直後の/r/を発音したりしなかったりするが、中国系の人々は、音素/r/を/l/に変えて発音するので、それがつづり字に反映され、Walk-kallimassing となる。また同様に、Arimas（あります）も Allo（ある）となる」と説明している。

杉本（2010：364）

(14)の下線部の「naraba」が「nallaba」、「aru」が「aloo」となっている理由であ

る。

5.2 *Pidgin English Sing Song*

また、小玉（1999：8）も「中国人は“r”の代わりに“l”と発音し」と言及しながら、同論文の注9にCharles G. Leland（1876）の *Pidgin English Sing Song* を参考している。

山崎（1988）では、/l/は相当する標準英語では/r/の音価をもつが、この言語では/l/の音価で発音されるものであると述べている。

(16)(7) b. When you make find one pond dly up you sure look-see t' he fish.³³⁾
（“th”の間にある“”は機能不明、以下同）

「池が干上がっているのをみつかれば、必ず（そこに）魚を見るだろう。」

山崎（1988：24）

要するに、中国人と結びつけた/r/から/l/へ変わる現象は、付説で出てくる「ヴォラピュク（Volapük）」という人工言語（本稿末尾参照）でも、*Exercises in the Yokohama Dialect* でも、*Pidgin English Sing Song* でもその姿を現わしていることが分かる。

近代以降、中国人はr発音が弱いという偏見が一つのステレオタイプとして発展し、そのステレオタイプが西欧に広がったことが分かった。このことは、4.3節で見た韓国でも同じ現象が中国人を表す表現として使われた点と合致している。

以上のことから、ポピュラーカルチャーに登場する中国人の発音が/l/に傾く現象は、中国人の特徴と決めつけられ、思い込んで用いられているステレオタイプにすぎないと言える。

このことから、ポピュラーカルチャー作品においてなぜ流音の現象が目立つ形で用いられているのかは、いわゆる中国人というステレオタイプの上に成り立っている役割語だからなのである。

6. まとめ

本稿で取り上げた近現代における日中ピジン中韓ピジンの言語資料は、ごく一部にすぎない。そして、挙げている文例はどちらかというと、創作物であるため、写実的な記録という面からは離れる所もあるかもしれない。資料に出てくるピジン語が当時実際に使われていた例か、書き手が創作した用例かを実証することは困難で

ある。それに書き手が誇張して書いているものもある。しかし、そのような所を承知した上で分析と考察を行なった。

本稿で現れたピジンと役割語との関係を結びつけることは、現段階ではまだ検討が必要だと判断されるが、中国人は弾舌音/r/を舌側音/l/に変えて発音するので、それがつづり字に反映された点を根拠として挙げた。すなわち「中国人は/r/の発音が苦手だ」という思い込みが、音素/r/ → /l/の入れ替えをつづり字に反映し、「中国人は/r/の発音が苦手だ」という考え方をより助長させたことが、役割語に成り得た一つの原因だと思われる。

日本語では音節の語頭にしか流音を置けないし、複子音は許容されないので、流音に対しては認知と調音の両側面で難しさを感じるはずである。それに比べ、日本よりは制約が少ない西欧と韓国ではこの現象が共通に現れたと考える。

付説

ヴォラピュク (Volapük)

ここで紹介するヴォラピュクは、調査の結果ウィキペディアに書かれている以上の説がないため、裏付けとしては未だに不十分である。しかし、下の記述と本原稿を関連付ける根拠になれると思われる所以、付説として置く。ヴォラピュクはドイツ人が「中国人は/r/の発音が苦手だ」という考え方を持つようになった1つの手掛かりになれるかもしれない。(下記の引用はウィキペディア⁽⁷⁾より。適宜修正している。)

(7)ヴォラピュクは1879年から1880年にドイツのバーデン出身のカトリック神父、ヨハン・マルティン・シュライヤーによって創られた人工言語である。シュライヤーは多くの単語をもっぱら英語から、また少しの単語をドイツ語やフランス語から取り入れたが、元の形が想像しにくいほど形を変えて使った。シュライヤーがこのように単語を変化させたのは主に理由がある。一つは/r/と/l/の区別が苦手な中国人などに配慮して/r/を使った単語を使わなかつたことである。1920年代、アリー・デ・ヨンクはヴォラピュクの使用者たちの同意を得て、ヴォラピュクの改造版をつくって1931年に出版した。しかし、ヨンクが1931年に改造するまで/r/はなかった。

オリジナルのヴォラピュクで音素/r/を抜いたことは中国語に/r/音がなく、/r/音の発音に引け目を感じる中国人に対する思いやりであったが、ヨンクはこの考え

がシュライヤーの間違いであると思い、後に改造を行なった。

「中国人は/r/の発音が苦手だ」というこの説がヴォラピュクを創ったシュライヤー本人の考えなのか、あるいはその当時のドイツにおける一般的な考えであったかは研究が行われていないため確言はできないが、少なくとも「中国人は/r/の発音が苦手だ」という考えがあったことは分かる。

注

- (1) (3) の囲み線のような「-i」の表出がしばしば確認される。これは閉音節に音素「-i」をいれることで「開音節化」しているのだが、そのことで中国人の声調に近い特徴が真似できるという効果を生んでいる。本稿ではこの現象についてはこれ以上言及しない。
- (2) (6) は大人向けのエッセイ、(7) は子ども向けの参考書、(8) は大人向けの参考書、(9) は大人向けの小説である。
- (3) 金振門作詞・朴是春作編曲『王書房恋書 (wangseobang yeon seo)』は1938年に発表され、一気に漫謡歌手金貞九のイメージを固め、中国と係わるはやり歌の中で大衆的な人気を一番多く享受した曲である。同時に中国人に対する否定的印象を笑い話で解いた代表的な作品である。「沒有的」「多多有」に解釈できる「ムユデ」「ダダユ」のような生半可な中国式表現は異国的な興味を誘発しながら軽い笑い者にしたりする。中国人絹商売人が明月という芸者に惚れてお金で歓心を買うが、結局はお金だけのつながりだったという設定。初めは一応笑えるが、その後には無意識的な偏見の跡が沈澱物のように残る。

明確に確認できる1940年度版と1973年度版の『王書房恋書』を比べ調査してみると、歌詞はむろん歌の前のセリフ部分も発売レコード社によってそれぞれ異なることがある。

Cheonritahyang e waseo bidan-i manhi pala
千里他郷 に 来て 絹 たくさん 売って
yeongwoli hante neogsi naga
明月 に 魂 [を] 盗まれ

(王書房恋書 : 1940)

- (4) 本来の日韓の流音は、語頭に立つことがないという頭音法則に従う。しかし外来語の語頭では使われている。このような借用語の現象では、母語に不許される有標的構造を外国語で現わす際に、借用は変動的に母語の制約に合致するように相応しい修繕を経る。

しかし、他の多くの借用語の現象では、母語では禁止された構造が借用語のみは例外的に許容されたりする。例えば、日本語の場合は来日（らいにち）、韓国語の場合は来日（래일 rae-il → 내일 nae-il）のような漢字語がある。

さて、英語の借用語はこの制約を守らなく、流音で始める多くの語を頭音法則の通過装置なしに使われている。

例えば、日本語の場合は radio (ラジオ) 韓国語の場合は radio (라디오 ra-di-o)。しかし、今現在の r 音は多少性質が異なっている。ピンインの音素解釈によると、r は「そり舌接近音」で、1 は「歯茎側面接近音」である。馮蘊澤 (2007) によると、日本語の r 行子音 (や韓国語の初声の r) は「はじき音」で、スペイン語に含まれる r は「ふるえ音」、そして中国語の r は「そり舌音」である。音声表記ではこの 3 つの音をそれぞれ [r] [r] [ɿ] の記号を用いて示すようにしている。また、

r は接近音か摩擦音かについて意見が分かれている。現在 r を無声摩擦音の sh [ʂ] に対する有声摩擦音 [ʐ] とする考え方が主流のようである。(中略) 現代中国語 (北京語) の破裂音及び破擦音は「有気」と「無気」を区別する。r を摩擦音 [ʐ] とすることによって、子音体系のなかに唯一の「有声」、「無声」の対立が存在することになる。極めて顕著な摩擦音の噪音を伴う sh に比べて、r はほとんど言つていいほど摩擦の噪音が聞こえない。(中略) sh の顕著な摩擦的噪音は声道における狭めによるものだが、sh に比べて、r の狭窄は幾分広く、舌尖の緊張度も sh に比べて随分緩いである。これらの調音上の特徴と、音素体系としての整合性を考えると、r を摩擦音 [ʐ] ではなく、接近音 [ɿ] とする方が適切であると考える。

(馮蘊澤 : 260)

上記から知られるように、中国語における r 音は学者によって意見が分かれているが、確かに日韓の r 音とは異なる特徴を持つ音に聞こえるため、そこから差が生ずると思われる。

- (5) 韓国語の流音は、ただ 1 つの「ㄹ (リウル)」で表記されるが、2 つの異音を持っている。「ㄹ (リウル)」が舌側音 /l/ と弾舌音 /r/ で実現される場合は、① ㄹ + 母音 → rv, ② ㄹ # → 1 #, ③ ㄹ + 子音 → lc, ④ ㄹ + ㄹ → ll であり、④ は広い範囲で ③ に含まれるため、大きく分けると 3 つのパターンに整理できる。
- (6) 日本の資料 (日本人が書いたもの) で、中国人の発音が /r/ から /l/ になる例は未だに確認されていない。音素 /r/ は日本人も苦手な発音で、区別が困難なためと思われる。
- (7) ウィキペディアの日本語版 :

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A9%E3%83%A9%E3%83%94%E3%83%A5%E3%82%AF>

ウィキペディアの韓国語版 :

<http://ko.wikipedia.org/wiki/%EB%B3%BC%EB%9D%BC%ED%93%8C%ED%81%AC> より引用

凡例

1. 本発表における韓国語のローマ字表記は人名・固有名詞・行政区域・一般・学術応用の中「学術応用表記式」によるものである。

調査 URL

「ローマ字変換器」【<http://roman.cs.pusan.ac.kr/RomanWeb.asp>】

引用テキスト

- 一条ゆかり (1986) 『有閑俱楽部 ⑥』 りばんマスコットコミックス 集英社
高橋留美子 (1988) 『らんま 1/2 ⑤』 少年サンデーコミックス 小学館
Daniel Defoe 作 Lee yeongho 訳 (2008) 『ロビンソンクルーソー』 地境社
Han Biya 韓飛野 (2001) 『中国見聞録』 青い森
Kim Jeonggu 金貞九 (1938) 『王書房恋書 (wangseobang yeon seo)』 オケレコード
—— (1940) 『金貞九傑作集 上』 オケレコード
—— (1973) 『王書房恋書 (wangseobang yeon seo)』 新世界
Kim Minjeong (2007) 『動映像で易しく学ぶ超初心者中国語』 dalagwon
Lee Gyujeong (2008) 『一番目とびりのページ』 韓国文学図書館
Seo Yeongsu (1999) 『朝鮮王朝五百年 (下)』 jigyeongsa
—— (2006) 『博物館探査記 (学習21)』 jigyeongsa

参考文献

- Tsuzuki M (1992) , "A Phonetic Study of the Korean and Japanese Lateral, Flap and Nasal", Ph.D.Thesis, Seoul National University.
金水 敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 岩波書店
—— (2007) 「役割語としてのピジン日本語の歴史素描」 金水敏 (編) 『役割語研究の地平』 pp.193-210, くろしお出版。
—— (2008) 「日本マンガにおける異人ことば」 伊藤公雄 (編) 『マンガのなかの〈他者〉』 pp.14-59, 臨川書店。
—— (2014) 『コレモ日本語アルカ?—異人のことばが生まれるとき—』 岩波書店。
小玉 敏子 (1999) 「*Exercises in the Yokohama Dialect* 再考」 『英学史研究』 Vol. 2000, No. 32 pp. 1-11 日本英学史学会
杉本 豊久 (2010) 「明治維新の日英言語接触—横浜の英語系ピジン日本語 (1) 一」 『成城大学大学院文学研究科—紀要—SEIJO ENGLISH MONOGRAPHS [No.42]』 pp. 357-381
日本国語大辞典第二版編集委員会 (2001) 『日本国語大辞典第二版 第十一卷』 小学館
山崎直樹 (1988) 「"PIDGIN-ENGLISH SING-SONG"の文献的価値について」 『中國文學研究』 pp.19-31 早稻田大學中國文學會
Hwang Byeongsun (1996) 「一人称代名詞 *uri* の意味と用法」 『Baedalmal 21』 pp.95-112
Baedalmal 学会 (황병순 (1996) 「일인칭 대명사 '우리 (들)'의 의미와 용법」 『배달 말 21』) pp.95-112 배달말 학회
Kim Ujong (1988) 『i joyonghan sigane』 beomusa
Park Seegyo (1996) 「韓国人と日本人の英語流音/l/と/r/の調音比較」 『音声学と言語学』 Lee hyeonbog 教授還暦記念論文集 pp.154-173 ソウル大学校出版部 (박시균 (1996) 「한국인과 일본인의 영어 유음 /l/과 /r/의 조음비교」 『음성학과 언어학』 이현복 교수 회갑 기념 논문집) pp.154-173 서울대학교 출판부
Sin Hocheol (2003) 「韓国語流音の発音教育に対する研究: 中国語母語話者を中心に」 『國語教育學研究 Vol.16』 pp. 253-272 国語教育学会 (신호철 (2003) 「한국어 유음 (流音) 의 발음 교육에 대한 연구: 중국어 모어 화자를 중심으로」 『국제교육학연구 Vol.16』 pp. 253-272 국어교육학회

Feng Yunze 馮蘊澤 (2007) 『中国語の音声』白帝社

(きむ・みんじょん 本学大学院博士後期課程)